64

熊本藩の医学教育と幕府医官

松﨑　範子
熊本大学医学部同窓会 熊杏会

熊本藩では藩主細川重賢（在位：1747–1785）の時代に藩政改革（宝暦改革）が推進されたが，その最中，宝暦6年（1756）に医学校（再春館）と薬園が開設された．再春館は公立医学校の始まりとされている．再春館初代教授は村井見朴，支えたのは長子椿寿（号；琴山）で，後に椿寿は吉益東洞の代表的な門人となる．

ところで医学校と薬園は同じ年の開設ではあるが，7月に藩医福間元斎が朝鮮人参植方及び製法一切を命ぜられたことに始まる．元斎が翌8月に薬園の開設に着手すると，藩は9月から12月にかけて薬園請込役の藩医3名を任命し，10月には薬園管理に藤井四郎兵衛（源兵衛）を置いた．12月に医学校が創設されると薬園は再春館附属となる．

熊本藩の薬園を蕃滋園といった．『肥後医育史』には扁額の文字は幕府の本草家野呂元丈によって書かれ，宝暦8年6月に藩主の側近から渡されたとある．いっぽう医学校の扁額については村井椿寿の「椿寿雑録」（山崎正董書写資料）に，野呂元丈と同様，幕府医官今大路道三に依頼したとある．また時習館初代教授秋山玉山から椿寿への書簡には，玉山が藩の医業吟味役町野玄寿と曲直瀬養安院（正山）のもとへ足を運んだとある．つまり宝暦4年に開講した藩校時習館の額は教授秋山玉山によるが，医学校や薬園の扁額は再春館初代教授村井見朴によることなく，幕府医官に依頼していたのである．

医学校や薬園の扁額を幕府医官に依頼した理由を考えるうえで，薬園の扁額が宝暦8年6月になって届いたことは注視すべきである．江戸中期の本草家田村藍水の弟子平賀源内著 物類品隙』（宝暦13年刊）に，藍水はこの年熊本藩を調査したとある．田村藍水は宝暦7年以降弟子の平賀源内らと，江戸の薬品会を物産学へと発展させた本草学者である．

そして熊本では医学校の行事，闘草会といわれる薬物採集による薬性の研究講習会が，藍水が熊本で調査をした翌年宝暦9年に始まっている．藍水は享保期の薬草政策をうけて，元文2年（1737）に幕府から朝鮮人参の種を与えられて人参の国産化を命じられ，宝暦13年には町医から幕府医官に登用されている．この藍水と熊本藩の関係をみるならば，薬園で朝鮮人参植方並びに製法一切を命じられた藩医師福間元斎を門人に迎え，明和元年（＝宝暦14年）に人参種を与えている（『田村藍水・西湖公用日記』）．熊本藩では藍水から得た薬草採集の手法をもとに闘草会を始め，その縁で人参種を得ることができたといえる．

いっぽう宝暦11年に村井椿寿と薬園の藤井源兵衛は，藩から根殻の調査を命じられる．するとその翌年に再春館を辞職した村井椿寿は，宝暦13年に京都の吉益東洞に入門して，宝暦14年5月1日に熊本に戻る．この間椿寿は「熊府薬物会目録」という一冊をまとめて，同年6月に熊本で薬物会を開催した（120回日本医史学学術大会抄録）．この準備をしたのが藤井源兵衛である．薬物会には藩内は勿論，大坂の本草家戸田旭山や旭山の弟子である平賀源内の開催した薬品会の関係者からの出品を得ている．平賀源内とのつながりも田村藍水からと考えられる．後に椿寿は東洞の著書をもとに『薬徴続編』や『方極剛定』などの医書を出版するが，椿寿の学問は本草学の知識に支えられたものであった．

熊本藩では医学校の開設によって幕府の本草学を積極的に取り入れ，これを受けて椿寿は吉益東洞に入門した．そして熊本藩の医学と医学教育を高めていったのである．